

江戸川区 第1回 WS 参加者意見 分野別まとめ

食育

○こども、区民

- ・余った野菜などをフードドライブ等に提供できるようにしたい。
- ・地域の子どもたちの農業などを知ってもらい、理解してもらうことが必要。そういった取り組みによって、子どもが大きくなった時に消費者として地元野菜を食べるなどの活動につながる。子どもに食育をすることが将来に向けた未来のための取り組みになる。
- ・食べ物に関心の少ないこどもが増えているため、ふれあい農園などで子どもだけでなく、親世代にも参加してもらい、食育を行っていくことが必要だと思う。
- ・小学校ではアレルギーなどの問題があるため、作物を育て、食べる取り組みは難しい。
- ・小学校向けに農作業の実況中継。
- ・農業体験や子ども食堂を連携して行う。実際に作物として育てたものを自分たちで料理して食べるなどの経験ができる。
- ・地場産の野菜を小学校等の給食に提供し、食育を行いつつ、地元でどのような野菜がつけられているのか興味をもってもらい取組をする。
- ・鹿骨地域の農業関係者に対して、小学生等の職業体験に協力をしてもらえるようにする。
- ・フードロス問題を解消するために、捨てる野菜の活用（フードバンクや子ども食堂への提供など）をして、江戸川区産の野菜に親しみを感じてもらおう。
- ・子ども食堂などで食育も併せて行う。

○食文化

- ・食育について、子どもと農家の二つをつなぐ
⇒インドや日本料理のレシピを持ち寄って、多国籍な料理を作っていく。地域の関係性を良好に、顔の見える関係性にする。
- ・カルチャースクールなどで江戸川区特産野菜の食文化が学べるといい。

農福連携

○行政・農家・福祉関係者とのつながり

- ・農福連携の取組は地方都市で行うよりも、都心に近い市街地で行うから効果がある。取り組みやすい。
 - ・障害者に農業に対する労働力不足を補ってもらいたい。
 - ・経営面でも農福連携を進めていくことができる。一般企業の障害者雇用では障害者が働きにくい環境であったりするが、畑に近い場所に住んでもらったりして農業に取り組んでもらう方が働きやすい可能性もある。環境整備もこれから重要。
 - ・障害者に対して、江戸川区特産の小松菜の収穫や野菜の袋詰め等の手伝いを行ってもらうなど、障害者に合わせて適材適所な働き口を紹介できるようにする。
- ⇒同じ作業は得意だが、新しい作業は苦手。
- ・農作業をきっかけに障害者の方との関係が築きたい。【再掲】
 - ・地域活性化になるように、農業と福祉の連携によって労働力、障害者の活動先となるような整備。

○生産から販売までのプロセス

- ・農福連携について農家側に時間を取らせてしまうという負担増となるが、稼げれば問題ない。

農業体験

- ・農業体験をすることによって、農業のイメージをよくしていきたい。
- ・東京都農林総合研究センターの人にアドバイスを受けながら、学校の校庭や屋上を使って、ガーデニングや野菜作りができないか。
- ・観光農園でだだ茶豆などの栽培を行って、子どもだけでなく、大人も楽しい農業体験。
- ・子どもに対して、土に触ってもらう機会（雑草取り体験など）を増やしていきたい。
- ・食物を育てている様子が見られる農場がいい。透明性があることで、何もしているかどうか地元の子どもたちにわかってもらいやすい。閉鎖的なものではなく、開放的なものにするすることで、農園に入りやすい環境造りをしていく。また、周辺との関わり方をもっとよくしていく。
- ・地場野菜について知ってもらえるように収穫体験などを行う。
- ・農業体験をしてみたいが、どこに、どのように相談すればよいのかわからない。
- ・地元学校と連携して、地元の農業に触れる機会をつくる
- ・収穫体験や子ども対象の種まき体験、空ビニルハウスで料理教室など農業を知る機会を増やす。
- ・家庭菜園
- ・20年以上前、地元自治会や子ども会で枝豆の栽培を行い、収穫したことはある。

つながり

○農家とのつながり

- ・農家さんとの関わりをどのように増やしていくかが重要。
- ・消費者と生産者が直接対面できるような場所が欲しい。
- ・希薄だった関係の人々が関係を深めていけるような仕組みがあればとても良い。
- ・農家が閉鎖的な印象を受ける（防犯的な意味もある）ため、周囲に対してオープンな関係にしていけたらよくなると思う。
- ・消費者や生産者の双方が win-win 関係になることが大事。農家と区民が話し合っ、メリットやできる取組を進めていくことが必要。
- ・労働力不足や食品ロス問題等の課題に対して、改善させるための仕組みを作っていく必要。
- ・無理のない取組を進めることで、地域の関係性を高めていければもっと良い地域になる。
- ・小松菜など歴史があるため、生産についてはスペシャリスト集団。
- ・農家が持っている畑の一部を貸してもらおう。シェアリング。
- ・塀などがあり、農業の様子が見られないため閉鎖的。オープンな環境づくり。

○鹿骨地域とのつながり

- ・江戸川区に外国人が多いという地域特性を生かしながら、活動を進めることができやすい。
 - ・東京都農林総合研究センターの人にアドバイスを受けながら、学校の校庭や屋上を使って、ガーデニングや野菜作りができないか。【再掲】
 - ・農家やトラック運転手などに向けた地元局ラジオの配信、鹿骨地域をもっとよく知ってもらおう。
 - ・食育について、子どもと農家の二つをつなぐ
- ⇒インドや日本料理のレシピを持ち寄って、多国籍な料理を作っていく。地域の関係性を良好に、顔の見える関係性にする。【再掲】
- ・農作業をきっかけに障害者の方との関係が築きたい。【再掲】

○地域外の方とのつながり

- ・海外の方と一緒に農作業を行い、交流を深めたい。
- ・メティ等の野菜をもとに、海外の方と料理教室などを行い、交流を深めていけるといい。

労働力

○アルバイト雇用

- ・人手不足ではあるけど、アルバイト代を払える余力がない実情。

○外国人労働者

- ・江戸川区に外国人が多く住んでいるため、農業に参加してもらうことはできないか。

○後継者不足

- ・若い労働力が減ってきている。
- ・いま農業に従事している人の後に働く人のつてがない。

新たな取組

○新規野菜への取組（江戸野菜、レモン、メティ等）

- ・小松菜に代わる新しい野菜（さつまいも、珈琲豆、みかん、江戸野菜など）作りをもとにまちづくりを行っていきたい。
- ・小松菜のブランド化によって、他の野菜に手を出しにくい状況となっている。
- ・現在、区では育てていない江戸野菜や新川梨などを積極的に取り入れていく。
- ・江戸川区にはインド人等の外国人が多く住んでいるが、流通している野菜よりもインド人に馴染みのある野菜（メティ等）を要望している。
- ・江戸川区にはインド人等の外国人が多いため、これまで江戸川区であまり扱っていないメティ等の野菜を育ててみる。
- ・新規野菜のメティについて栽培や生産をはじめたばかり。小松菜と収穫サイクルが同じメリット。
- ・小松菜以外の野菜では、タマネギは農家にとって収穫が大変であり、気候によって収穫スケジュールがずれるため適さない。また、ハウレンソウ系も病原菌の持込の原因となる可能性があるため適さない。

○購買方法

- ・買い物はスーパーなどで購入する人が多いため、地元野菜を積極的に使ってくれる人がわからない。地域の八百屋などで野菜を置いてもらいアピールすることはできないか。
- ・野菜販売の規制緩和をしてほしい、また、販売するための施設もほしい。
- ・区の施設などで産直野菜を売ることで、農家と区民の関係性の向上を図る。

○空き家利活用

- ・空地、空き家や古民家を活用し、農家とのつながりの拠点化。
- ・空き家マッチング制度を利用して、マルシェを開催してみる。

○農業 PR（SNS 等）

- ・何をしているか SNS 等を利用して発信していく。クラブハウスといったツールを使用し、何を栽培しているかなど分かりやすく、親しみやすい関わりを増やしていく。
- ・花卉栽培が盛んなため、鹿骨地域の街角で花を育てるなど地域紹介を兼ねて整備する。また、SNS 等を活用して花の見どころを周知する。
- ・若い人達に地元農業を考えてもらえるように、1 年を通して農業関係者等とのディスカッションできる機会を設ける。

○マルシェの開催

- ・農家は畑仕事が一止まることになるため、マルシェを運営するのは難しい。可能であれば、マルシェを運営する人は畑仕事をする農家とは別の人を立てることはできないか。
- ・マルシェでは消費者の反応がわかることがメリット。
- ・マルシェなどはしづらい社会的状況。
- ・空き家マッチング制度を利用して、マルシェを開催してみる。【再掲】

まちづくり

○拠点づくり

- ・直売所やアンテナショップ等の拠点を鹿骨地域につくり、夜の販売時間外についても、子ども食堂や勉強部屋として活用できないか。
- ・農地を大切にす地域として、緑を大切にできるような仕組み（住宅の建て方や土地の使い方等）ができる地域として魅力あるものになる。
- ・流堀親水公園等の地域の親水公園を休み場として整備する。
- ・農地を休憩所にするなど拠点づくりへの活動。

○防災

- ・災害から人を守る生産緑地の整備。

花卉活用

○まちの花整備

- ・公園などで花卉栽培を広げていきたい。
- ・街路樹ではなく花壇として整備し、花の街道を鹿骨地域にひろげることができないか。
- ・整備は業者に依頼するのではなく、地元小学校や福祉関係（障害者）に行っていただく。
- ・農業関係市場には花卉農家は登録していない場合が多いため、市場に出したくても出せない。マルシェや直売所で販売する必要がある。
- ・花は野菜のようにリピートする機会が少ない印象であるため、マルシェなどに花卉販売が行い、身近な販売ができるようにする。
- ・公共事業で使用する花などは鹿骨地域の花卉農家から買い付けるなどして、販売促進につなげる。
- ・園芸店よりも安価に手に入ることを周知し、地産地消につなげる。
- ・江戸川区主催の公共事業等に使う花を、地元の鹿骨地区産として使用する。

○小学校を花卉の供給拠点化

- ・鹿骨小学校の屋上を「屋上ガーデン」として整備。
- ・子どもたちが土に触れる機会を増やせるようにする。
- ・農と花への関心を高めるため、地域の自慢として意識させていきたい。

イベント

○鹿骨地区のウォーキングマップ

- ・畑をめぐるウォーキングマップやスタンプラリーの作成。
- ・小松菜発祥というブランド力を生かし、区内の畑巡りをするなど地域活性化を行いたい。
- ・寺院が多いため、観光資源となりえる花や場所の広報。

○農業 PR

- ・ビニルハウス栽培で作業風景が見えるようになれば、住民の興味をもっと引けると思う。
 - ・農業の見える化を行い、農作業を親しみやすく、エンターテインメント化する。
 - ・地場野菜を使った飲食店の増加を図り、PR も併せて行う。
- ⇒農家は野菜を直接卸せる飲食店の拡大に向けたノウハウはないので、営業やマーケティングを行ってくれる人材がほしい。
- ・休耕畑となっている場所でバンカーゴルフ等のアクティビティを企画。
 - ・収穫体験や子ども対象の種まき体験、空ビニルハウスで料理教室など農業を知る機会を増やす。
 - ・空ビニルハウスで料理教室。

○その他

- ・農家対象の婚活パーティを行ってみたい。農家に対するマイナスイメージが少しある。
- ・鹿骨地域でつくった野菜を用いたコラボレシピを作成し、広めたい。
- ・国際交流で互いの国の料理を作って試食会。

経営

○売れる野菜のリサーチ

- ・売れる野菜をもっと知りたい。農家はそこまでリサーチできていない。
 - ・消費者のニーズに合わせた野菜作りも大切。消費者からのフィードバックを生産に生かしたい。
 - ・地場野菜を使った飲食店の増加を図り、PR も併せて行う。
- ⇒農家は野菜を直接卸せる飲食店の拡大に向けたノウハウはないので、営業やマーケティングを行ってくれる人材がほしい。【再掲】
- ・需要のある野菜を把握し、売れる品目野菜の栽培をするのはどうか。
 - ・小松菜がブランド化されすぎており、それ以外の野菜への着手がしにくい。
 - ・今後の都市農業を経営目線、食育目線から考えていくことが必要と思う。
 - ・江戸川区の農業の特徴は、経営規模が小さい。
 - ・需要と供給を考え、時代に合った野菜や食材を提供することが大事。
 - ・経営人数が少なく、農家だけでは厳しい現状。効率を上げて野菜の収穫等を行っていかねばならない。
 - ・江戸川産の小松菜は主にスーパーではなく、豊洲市場に卸し料亭で使用されるためブランド化されている。そのため、地元では小松菜を購入できる機会が少ない。

○直売所や販売所での運営方法

- ・鹿骨地区でつくった野菜を今よりも効率よく売るための営業マン的な役割な人物が欲しい。
- ・地域で育てた野菜を直販できるような場所がほしい。
- ・江戸川総合人生大学と連携して、地場野菜の周知を行い、販売促進につなげる。
- ・JA の移動販売車を利用して販売する場合、販売員の確保が困難。
- ・売れ残った野菜は廃棄するのではなく、鹿骨地域の食堂に出したり、弁当に野菜を入れたりして、付加価値をつけて、販売につなげる。
- ・鹿骨地域には漬物文化があるため、規格外の野菜などを利用し、加工品として販売できないか。
- ・野菜パウダーに規格より大きくなってしまった野菜を利用し、無駄をなくす取組。

その他

○施策・税金

- ・生産緑地の仕組みについてよくわからない。税金の仕組みなど分かりやすいようにしてほしい。
- ・生産緑地に関する情報提供を農家に向けて積極的に行ってほしい。
- ・農業に関連する法律や条例を改正してもらい、販売しやすくなるといい。

○社会問題

- ・フードロス問題を解消するために、捨てる野菜の活用（フードバンクや子ども食堂への提供など）をして、江戸川区産の野菜に親しみを感じてもらおう。【再掲】
- ・フードロスになり得る野菜については、子ども食堂に安く卸す等の取組ができないか。
- ・売れ残った野菜は廃棄するのではなく、鹿骨地域の食堂に出したり、弁当に野菜を入れたりして、付加価値をつけて、販売につなげる。【再掲】
- ・野菜（小松菜等）パウダーには、残留農薬が凝縮されてしまう。

○新技術

- ・スマート農業技術へ取り組み、人手不足解消や作業効率化を進めたい。
- ・農業法人の立ち上げ支援をしてほしい。

○アート

- ・ビニルハウスをアートな雰囲気にする。
- ・アートボックスとのコラボレーション。